



TITLE:

# 所有形式の多機能性に関する認知言語学的考察

AUTHOR(S):

木本, 幸憲

---

CITATION:

木本, 幸憲. 所有形式の多機能性に関する認知言語学的考察. 言語科学論集 2011, 17: 21-47

ISSUE DATE:

2011-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/155040>

RIGHT:

# 所有形式の多機能性に関する認知言語学的考察

きもと ゆきのり  
木本 幸憲

京都大学大学院／日本学術振興会

kimoto@hi.h.kyoto-u.ac.jp

## 1. 序論

本稿は認知言語学の枠組みから、所有形式の持つ多機能性に着目し、そこからどのような通言語的一般性が存在するかを考察するものである。特にここで問題とするのは、名詞句内の所有者を標示する形式が、あるイベントの主語を表す形式として用いられている以下のような場合である<sup>1</sup>。

- (1) a. *Brown's {leg, books, house}*  
b. *Brown's deftly painting his daughter (is a delight to watch.)*
- (2) a. 花の色、人の家  
b. 花の咲く樹、人の住まぬ家

(Quirk *et al.* (1985: 1291), 山田 (1936: 691))

例えば (1) では、所有関係を表す (1a) と同一の形式である *Brown's* が、(1b)のように動名詞によって表されるイベントの主語を表す標識としても用いられている。また現代日本語においても、典型的には (2a) の例文に見られるような所有を表す表現である「花の」「人の」は、(2b) では連体修飾表現における主語として用いられている (e.g. 渡辺 1971, 菊田 1994)。この種の現象は日本語の研究としては「が・の交替」としてかなりの研究の蓄積があるにもかかわらず、これがどのように通言語的に位置づけるべきかについては、十分な議論がなされていないのが現状である。

本稿では、この種の表現を所有形式の多機能的性質として捉えた場合、以下の階層性が通言語的に見られることを指摘する。

## (3) 所有形式の多機能性に関する階層性

分離可能所有の所有者 > 分離不可能所有の所有者 > 派生名詞の補語 > 名詞化  
節・関係節の主語 > 主節の主語

さらにこの階層性の機能的な基盤を検証するため、Langacker の認知文法 (Langacker 1991, 2008) や 機能主義言語学の枠組み (Givón 1990) からその傾向・一般性を駆動する意味的基盤を考察する。それによって、上記の一般的傾向は Langacker (1991, 2008) や Givón (1979, 1990) が指摘した名詞のプロトタイプ性 (i.e. 時間的持続性と概念的自律性)、さらに同じく Givón (1990) で述べられている定形性のスケール (finiteness) が関与していることを示す。

本論の構成は以下の通りである。2 節で所有標識の多機能性をフィリピン諸語とヤラワラ語で観察し、その分布が異なることを示す。3 節でこの多機能性の分布にある一定の傾向があることを示すために、含意的普遍性という言語類型論で示されてきた普遍性を紹介し、さらに、言語表現の多機能性における含意的普遍性を示すために有効だと思われる意味地図モデルを紹介する。4 節では 3 節で立てた仮説が通言語的に適用可能であることを示す。さらに 5 節でその意味的な動機付けを認知文法の枠組みから検証し、6 節を結語とする。

## 2. 所有形式をめぐる問題

本節では、言語によって、また同一言語であっても問題とする所有形式によって、異なる機能を担うこと、つまり属格形式の多機能性が言語によって異なることを示す。

### 2.1. フィリピン諸語の所有形式

タガログ語、イロカノ語、イバナグ語を初めとしたフィリピン諸語 (オーストロネシア語族) では、所有形式が節の格標識と同一形式を取る (Dita 2010, Schacter and Otnes 1976)。例えば以下のような例である。

- (4) *Nakita niya ang kaibigan niya.* (Tagalog)  
 saw    ERG.3SG    DET    friend    GEN.3SG  
 'he/she saw his/her friend.'
- (5) *Inusar da ti sapatos da.* (Ilocano)  
 Used    ERG.3PL    DET    shoes    GEN.3PL  
 'They used their (own) shoes.'
- (6) *Baggawan=nu i takki nu.* (Ibanag)  
 wash=ERG.2PL    DET    feet    GEN.2PL  
 'Wash your feet.'

(Dita 2010: 51-53)

タガログ語では、(4)に見られるように、*niya* という形式が3人称単数形を担っているが、その際に他動詞の主語である能格 (ERG) と、属格 (GEN) とが同一形式を取っているのが分かる。さらに、イロカノ語 (5) やイバナグ語 (6) でも *da*, *=nu* において同様の現象が観察できる (Dita 2010, Schacter and Otones 1976)。

このような主節主語と属格が同一である現象はフィリピン諸語に限った話ではない。例えばアイヌ語では、拘束形代名詞において同様のパターンが見られ、ユート語 (Givón 2011) においては非主語を示す格形式と同一形式である。またタリアナ語の属格形は拘束形代名詞において他動詞・自動詞の主語と一致した形式を取る (Aikhenvald 2003)。つまり、この現象は、語族・語派や、地域の変異を越えた多くの言語で見られる現象だと言える。

## 2.2. ヤラワラ語の所有形式

次にヤラワラ語 (アラワ諸語; ブラジル) の属格標識を見てみよう (Dixon 2004)。この言語の特徴は、所有物の意味的性質によって所有形式の現れ方が異なり、いわゆる分離可能所有 (alienable possession) と分離不可能所有 (inalienable possession) の区別があることである<sup>2</sup>。

### (7) 分離可能所有 (*ibid.*: 295)

- a. *Okomobi kaa kanawaa*  
       name      POSS    canoe  
       'Okinobi's canoe'
- b. *jati kaa faha*  
       stone    POSS    water  
       'waterfall (lit. stone's water)'

### (8) 分離不可能所有 (*ibid.*: 328)

- a. *Okomobi ino*  
       name    tooth  
       'Okomobi's tooth'
- b. *Okomobi inohoti*  
       name    mouth  
       'Okimobi's mouth'

まず、(7)で見られるカヌーや水など、所有者である人や、石から分離が可能だと考えられる概念においては、所有標識である *kaa* を連結辞として用いることができる。しかし (8) で

見られるような、「歯」や「口」など、その所有者から分離することが不可能だと考えられる概念は、(7) のように *kaa* という連結辞で接続することはできない。その代わりに所有者と所有物を表す名詞は、直接並置することによって、所有概念を表現することになる。分離可能／不可能の区分は当該言語によって切り分け方が異なるが、一般的に所有権 (ownership) を表すような所有関係は分離可能と見なされることが多く、身体部位や親族名称は一般に分離不可能所有として言語化されることが多い (Dixon 2010b)。さらにヤラワラ語では、身体部位の他に ‘itch’, ‘smell’, ‘being angry’ などの属性概念、‘top surface of’, ‘inside of’ などの方向・位置語彙、‘name’, ‘companion of’, ‘ornament’, ‘food’, ‘path’ などの連想関係も身体部位と同様分離不可能所有として言語化される (Dixon 2010b: 280)。

### 2.3. 所有形式は多機能的か同音異義的か

以上タガログ語などをはじめとするフィリピン諸語とヤラワラ語の属格標示を比較した。以上に見たような事実において明らかなように、その名詞句内所有がどのような形式で表示され、またその形式がどれくらいの機能領域を持つかは、言語によって多様であることが分かる。特に、従来類型論的な観点からこのような属格標識の多機能性を論じた研究は存在しなかったのも、言語による多様性の反映とも考えられる。

実際に属格標識の多機能性に関する類型論的研究が成熟していないことは、個別言語の研究を見ても間接的に明らかである。例えばフィリピン諸語の格標識を問題にした Dita (2010) を見てみよう。

In my earlier paper (Dita 2007), I have distinguished the functions of ERG and GEN and I have argued that **homomorphic items** be labeled accordingly to distinguish the function of the two. This paper maintains separate case-marking for these two sets. (*ibid.*: 53 強調は筆者による).

この多機能性がフィリピン諸語のみに見られる特殊な現象であれば、このように単に「同音異義的な形式」と結論づけることも妥当かもしれない。しかし 2.1. の終わりに述べたように、他動詞の主語 (A) や自動詞の主語 (S) であることを示す標識と属格標識は同一の形式であるパターンは (特に人称接辞を取る言語を中心に) 通言語的に認められる<sup>3</sup>。つまり、そこに何らかの傾向が見られると考えるもおかしくない。

以下では言語類型論で用いられる含意的普遍性と、言語形式の多機能性を説明するために用いられる意味地図モデルを導入し、仮説を立てることとする。

### 3. 所有形式に対する仮説

#### 3.1. 類型論的普遍性と意味地図モデル

言語類型論の目的の一つは、通言語的に観察される言語普遍性を経験的手法で発見することである。その手立てとして、Greenberg (1961) が統語類型論に導入した「含意的普遍性」が用いられてきた。もともとこの方法による言語普遍性は統語論の分野ではなく、Jakobson が音韻論の分野で用いたものであった (Jakobson and Halle 1956)。そこでは人間言語の音素はそれぞれが無秩序に習得されるのではなく、ある一定の順序で習得され、ある音素の習得は、別の音素の習得を前提として行われることが示された。さらに Greenberg らは、そのような含意的普遍性を統語論の分野に応用し、多くの含意的普遍性を提案した (e.g. Greenberg 1961)。例えば以下のような普遍性が代表的なものである。

(9) Languages with dominant VSO order are always prepositional. (Universal 3; *ibid.*: 78)

(10) With overwhelmingly greater than chance frequency, languages with normal SOV order are postpositional. (Universal 4; *ibid.* 79)

例えば上の普遍性は、通言語的に語順と接置詞のタイプ（つまり前置詞か後置詞か）に強い関係性があることを示したものである。このように彼らの研究は従来捉えきれなかった様々な語順や統語カテゴリーの間に強い相関関係が予測できることを明らかにした。

近年、この種の普遍性の研究は意味論の分野でも盛んに行われるようになってきている。上記の研究は統語的な普遍性を究明したものであったが、認知言語学や機能主義言語学の発達に伴って、意味論の研究にも言語類型や普遍性が分析されるようになってきた。そこで用いられているモデルが意味地図モデルであり、理論面では Croft (2001) のラディカル構文文法理論においてはその理論的根幹として意味地図（概念空間）モデルが位置づけられている。彼は、統語カテゴリーや統語構造は個別言語に特殊なものであり、真の普遍性は求められないとしている。実際の普遍性は、その形式が分布する概念や、その概念上の構文の分布の傾向にあると主張する (*ibid.*: 61)。また Croft (1991) の品詞論、Kemmer (1993) による中動態の分析、Haspelmath (1997) による不定代名詞の分析は意味地図の手法を用いた研究の代表例である。では実際に意味地図モデルでの分析がどのようなものかについて複数形接辞の分布を例に見ていこう。

Croft (2001) によると、意味地図モデルは通言語的に見られる普遍性と、言語間のコーディングに関する特殊性の両方を記述可能なモデルであるとされる。例えば、複数形の接辞が付与可能な意味カテゴリーは言語によって異なるが、それにはある一定の普遍性があるとされている。これを意味地図を用いて書くと以下のようなになる。

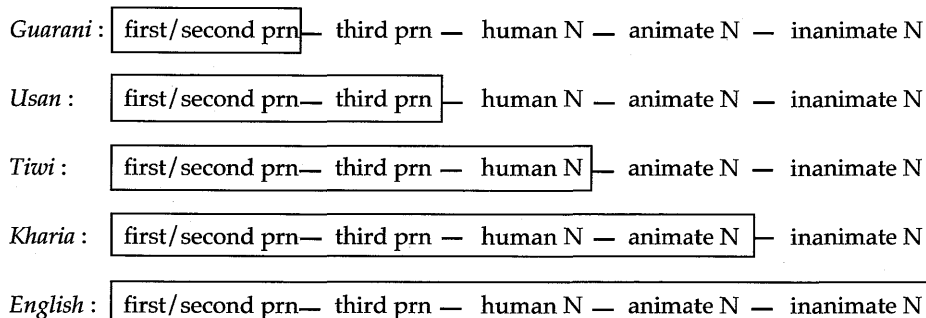


図 1 複数形の接辞化に関する意味地図 (Croft 2003: 134)

ここではまず first/second prn から inanimate N にわたる概念空間 (conceptual space) が設定され、この配列は言語普遍的であると考えられる。しかし、その普遍的な概念空間上にある言語がどのようなコーディングを行うかは、個別言語によって異なる。例えば、Guarani 語では first/secon pronouns のみが複数形屈折を持ち、逆に英語は inanimate N までのすべての意味カテゴリーが複数形屈折を持つ。このように言語毎にその文法がコード化する範囲は異なるが、それは個別の意味地図によって表されている。しかし、その根底にある概念スペースは同一であり、それは言語普遍的な側面を持つ。なぜならそこには含意的普遍性が成立しており、Usan 語のように third pronoun に複数形屈折があるということは、first/second pronoun にも複数形屈折があることを意味し、Kharia 語のように animate noun が複数形屈折を持つことは、first/second pronouns, third pronouns, human nouns が複数形屈折を持つことを意味するからである。

### 3.2. 所有形式をめぐる概念空間と含意的普遍性

以上の枠組みを基に、本論での検証すべき仮説を提示していく。本論では冒頭でも述べたように、意味地図の手法を用いて、所有形式に関する普遍性を提案することとなる。まず以下に示されているのは各言語の所有形式が生起する構文の広がりを示したものである。ある言語の所有形式がどのような構文に生起するかはその形式毎に異なり、その機能領域の差が図 1 で見たような包含関係となって現れる。このようなある所有形式が現れ出る環境の隣接的な関係は、概念的・機能的な基盤によって支えられていることを 5 章で示すため、これを所有形式の概念空間と呼ぶ。

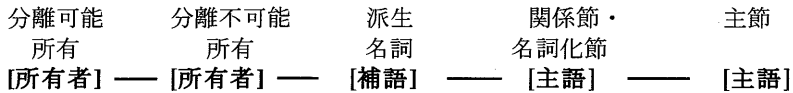


図2 所有形式に対する概念空間

まずもっとも左に位置するのは、分離可能所有の所有者役割である。所有表現の分離可能性については2節でヤラワラ語の例を挙げながら述べた。その隣に位置づけたのが分離不可能所有である。これら二つの所有表現においては、我々に身近な英語・日本語などの言語で、その所有関係の違いによる区別のないことは、この仮説においては何の問題にもならない。なぜならそれらの言語（英語、日本語ほか）では、分離可能所有と分離不可能所有が同一の標識によって区別されることなく使用されることを示すと考え得るからである。

中央に位置づけられているのは、語彙的な派生を経た派生名詞、または同族名詞である。これは例えば、*Mary's close resemblance to her grandmother*, *John's walking*、日本語で「研究」「読書」「視聴」などのいわゆる「サ変名詞」が含まれる。これらは派生のプロセスによって動詞から発生した名詞か、もしくは動詞形と同一の語根で表されるという特徴を持つので、上記の所有表現と異なり、イベント性が伴うこととなる。しかし、名詞節／関係節と異なるのは、語彙的な派生・転換である以上、テンス・アスペクト・モダリティが付与できないことにある<sup>4</sup>。

さらに動詞が派生的に名詞とならず、従属節として機能する場合はその右の関係節・名詞化節に対応することとなる。ここでは時制やアスペクトが動詞に付与できる点、主語・目的語などの項構造が見られる点、主語や目的語との呼応関係が動詞によって示される点、そのような意味で節の機能を有すると考えることが出来る。しかし、何らかの名詞節を表す（もしくは関係節を表す）標識が節に付与されて、節全体が他の節の要素になりうるという点で、一番右に位置する主節とは異なる。

さらに以上で示した概念空間とそれに基づく諸言語の所有形式の意味地図は、それが妥当かどうかは、隣接した機能同士が同一の形式で担われやすいか、という傾向と軌を一にする。したがって上記の概念空間の妥当性を示すということは、以下の含意的関係の妥当性を示すことに繋がる。

#### (11) 所有形式に関する含意的関係

ある所有者を表す形式が概念空間上の複数の領域を占める場合、その分布は概念空間上の隣接した機能を占めなければならない。



これは例えば、ある言語の分離可能所有が、分離不可能所有の機能を担わずに、派生名詞の補語を担ったり、ある分離可能・不可能の区別を持たない言語の所有形式が派生名詞の補語を担わずして従属節や主節の主語を担ったりする、という現象は発生しないことを意味する。なぜなら隣接した機能を担わずに、それより隔たった機能を担うことは、その概念空間の設定自体に問題があることを示すからである。もちろん (11) で示した含意的関係は、統計的な傾向として捉えられるべきであり、絶対的なものではない。以下の 4 節では本節で示した概念空間とそれに基づいた (11) の仮説が多くの言語によって裏付けられることを見ていく。

## 4. 所有形式の分析

### 4.1. ヤラワラ語の所有形式 *Kaa*

ヤラワラ語 (Brazil, Arawa language family) では、2 節で見たように、分離可能所有と分離不可能所有の区別が存在し、分離可能所有には、*kaa* という連結辞を用いる。

(12) [所有者 *kaa* 所有物] 形 (分離可能所有) (*ibid.*: 295)

- a. *Okomobi kaa kanawaa*  
       name       POSS   canoe  
       ‘Okinobi’s canoe’
- b. *jati kaa faha*  
       stone       POSS   water  
       ‘waterfall (lit. stone’s water)’

(13) [所有者 所有物] 形 (分離不可能所有) (*ibid.*: 328)

- a. *Okomobi ino*  
       tooth  
       ‘Okomobi’s tooth’
- b. *Okomobi inohoti*  
       mouth  
       ‘Okimobi’s mouth’

*kaa* を用いる形式は分離可能所有に属するので意味地図上ではもっとも左に位置し、分離不可能所有はその右に位置づけられる。ここで分離不可能所有のほうで、派生名詞に近接しているの、形式的にも、派生名詞の補語は分離不可能所有でもって表すことが予測される。実際にヤラワラ語では、以下のような動詞と同族関係にある名詞の補語は、分離不可

能所有の形式で表さなければならず、分離可能所有の形式である *kaa* の介在は許されない (*ibid.*: 317, 345-6)。

- (14) a. *oko kome-ne* (1sg pain) 'my pain'  
 b. *-koma-* 'be hurt'
- (15) a. *oko neme-ne* (1sg top.part) 'my upper part'  
 b. *-neme-* 'be high'
- (16) a. *meefanawi nafi* (women all) 'all the women'  
 b. *-nafi-* 'be big, large'
- (17) a. *sako hoti* (bag hole) 'mouth of bag'  
 b. *-hoti-* 'have a hole' (*ibid.*: 317, 345-6)

以上を踏まえると、この言語での分布は、設定した概念空間に沿った形の意味地図として図3のように表すことが出来る。

分離可能 所有	分離不可能 所有	派生 名詞	関係節・ 名詞化節	主節
[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]
PR <i>kaa</i> PD	PR PD			

図3 ヤラワラ語の所有形式に関する意味地図

## 4.2. 上代日本語所有形式「つ」

4.1.で見たパターンは、機能的範囲がもっとも狭い所有の形式、つまり分離可能形式の所有であった。しかし、分離可能／不可能所有の区別を持たない言語においては、その所有形式が分離可能／不可能所有の領域の両方を占め、派生形の所有は含まないパターンが見られる。これは、例えば奈良時代のいわゆる上代日本語で使用されていた「つ」という接辞を使用した所有形式を挙げることができよう (『時代別国語大辞典上代編』)。この所有形式は、機能としては場所・方角・属性などの限られた領域を占めるのみである。以下を参照。

- (18) a. 沖つ波 (沖追波；沖から来る波) (万葉集 三九九三)  
 b. 前つ門 (マエツト；正面の門) (記崇神)

(19) a. 醜つ翁 (シコツオキナ ; 醜い老人) (万葉集 四〇一一)

b. 斎つ磐群 (ユツイハムラ ; 神聖なる磐群) (万葉集 二二)

(『時代別国語大辞典上代編』: 458)

つまり、これは概念空間上では図4のような分布として描くことが出来る。ここでも (11) で見たような普遍性が成立しており、隣接した2つの所有者の機能を同一形式が担っている。

分離可能 所有	分離不可能 所有	派生 名詞	関係節・ 名詞化節	主節
[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]

図4 上代日本語の所有形式「つ」に関する意味地図

#### 4.3. 中国語の所有形式

多くの言語においては、所有形式でもって、動詞派生名詞の補語も表す傾向がある。例えば英語でも *the father of the bride* と同一形式の *of* が *the performance of the dancer* という動詞派生名詞の補語としても用いられる。またヤラワラ語においても、分離不可能所有の形式で同族名詞の補語が表される例を見た。その他にも例えば、中国語（北京官話）においては、*PR de PD* という分離可能・不可能所有を表す形式が、動詞派生名詞の補語としても用いられる (Po-Ching and Rimmington 2004)。

(20) a. *wō-de shū*

I-POSS book

‘my book’

b. *tā-de míngzi*

she-POSS name

‘her name’

c. *wǒ-de qǐngqiú*

I-POSS request

‘my request’

(*ibid.*: 76-80)

例えば (20) では、言語によっては分離可能所有としてカテゴリー化される「私の本」という所有関係が *de* という所有の標識によって被修飾語の *shū* を修飾しているが、それ以外に

も、言語によっては分離不可能所有でカテゴリー化されるような「彼女の名前」という関係も *de* で示すことができる。さらに本来的には動詞として用いられる *qǐngqiú* (要請) という語であっても、それが名詞として品詞転換 (conversion) が起こった場合には、(20c) のように所有形式と同様の形式で表すことが出来る。もっとも、中国語の *de* は非常に多義的であり、関係節を導くことも出来るほか、その他多くの名詞修飾の標識として用いられる (Po-Ching and Rimmington 2004)。しかし所有形式として用いられた場合には、このような通言語的な傾向に沿った振る舞いをすることが観察できる。以上を意味地図に図示したのが図 5 である。

分離可能 所有	分離不可能 所有	派生 名詞	関係節・ 名詞化節	主節
[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]

図 5 中国語の所有形式 *de* の意味地図

#### 4.4. 英語の所有形式 NP's NP

そしてこの所有関係がさらに拡張したパターンが英語の *PR's PD* の構文に見られる。英語の属格は、動詞・形容詞派生名詞のみならず、いわゆる動名詞の主語としても生起可能である (Quirk *et al.* 1985)。

##### (21) 分離可能／分離不可能所有

- a. his bag, his desk, his office, his books
- b. his eyes, his arms, his parents, his wife, his name

##### (22) 動詞派生名詞

- a. their serious conversations
- b. Brown's deft painting of his daughter is a delight to watch.
- c. his extreme sadness, his great happiness

##### (23) 動名詞

- a. John's throwing the ball
- b. Tom's speaking English loudly (surprised us.)
- c. Brown's deftly painting his daughter (is a delight to watch.)

(*ibid.*: 1291)

英語の NP's NP という形式において、(21, 22) のように分離可能・不可能所有や、動詞派生名詞において用いられる点は、中国語と相違ない。しかし英語において特徴的であると考えられるのは、この NP's NP という形式が動名詞という、派生名詞と名詞化節・関係節の中間的なカテゴリーに用いられていることである。その位置づけは、統語論的な振る舞いからも明らかである。まず派生名詞よりも名詞化節・関係節に近い特徴としては、(i) 目的語を取ることができる点、(ii) 形容詞ではなく副詞で修飾を行う点 (e.g. *his careful driving of the car / his driving the car carefully*) である。しかし名詞化節・関係節と比較して、テンス・モダリティを付けることが出来ない点では派生名詞に近い (Langacker (1991: 31-5) 参照)。

しかし、英語では概念空間上のさらに右の領域、つまり定形従属節である名詞化節・関係節、そしてもっとも右の機能範疇として設定された主節においてはその主語を属格形式でもって表現することは当然ながら不可能である。

(24) 名詞節・関係節

- a. He is indifferent to [what {he/\*his} eats]. (名詞化節)
- b. We took the train to [the town in which {he/\*his} lives]. (関係節)

(25) 主節

- a. {He/\*His} broke a vase standing on the table.
- b. {Tom/\*Tom's} broke a vase standing on the table.

以上を踏まえた英語の NP's NP の分布関係を意味地図として図示すると以下のようなになる。ここでは暫定的に動名詞主語という機能を当てはめたとするとその配列からして派生名詞と名詞化節・関係節との中間的位置づけとなることから、以下のような意味地図を描くことが出来る。これは (11) の仮説が適用可能であることを示していると言える。

分離可能 所有	分離不可能 所有	派生 名詞	動名詞	関係節・ 名詞化節	主節
[所有者]	[所有者]	[補語]	(主語)	[主語]	[主語]

図 6 英語所有形式 NP's NP の意味地図

4.5. 古代日本語の所有形式「が・の」

さらに古代日本語の格助詞「が・の」においては、英語の所有形式に比べてもより広い

機能範疇を持つ。第一に日本語はその歴史を通じて分離可能・不可能の形式的区別を行っていないので、以下の例にあるように (26) の分離可能と思われるような所有関係であっても、(27) の分離不可能と思われるような所有関係であっても「が」と「の」でその意味を表すことが出来る<sup>5</sup>。

- (26) a. わが身はか弱くものはかなきありさまにて (源氏・桐壺)  
 b. ひかる源氏の身もなけつへきとの給けんも (狭衣物語)
- (27) a. 我が庵は都の辰巳しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり (古今・雑下)  
 b. 御をくりの女房のくるまにしたひのり給て (源氏)

さらに (28) のように、英語の動詞派生名詞に相当する漢語由来のサ変名詞「命」「出家」であったり、和語の動詞を連用形にした名詞形「乱ひ (まがひ)」の動作主も同様に「が・の」でその関係を表すことが出来る。

- (28) a. わが出家は成就するなりけりと仰せられて (大鏡)  
 b. 春花の散りの乱 (まが) ひ (万葉)

ここまでは上で見た英語や中国語と相違はないが、さらに日本語の「が・の」と特徴として、名詞化節・関係節をはじめとした節の主語に用いることができる、という特徴がある。山口 (2001) では「奈良時代・平安時代には「が」を受けた述語で文を終える場合、「が」の前に来る語が名詞であればそれを受ける述語は連体形になるか、条件句の中かであって、主節の述語となることはなかった。」と述べている (*ibid.*: 119)。

- (29) a. 興なくて安らかなるが勝りたる事也 (徒然・二三一段)  
 b. 春のあしたに花のちるをみ、秋の夕暮れにこの葉のおつるをきき (古今・序)  
 c. 雀の子をいぬきが逃しつる (源氏・若紫)

例えば (29a) では、「勝りたる」において助動詞「たり」はその連体形「たる」となっており、(29b) でも、「ちる」と「おつる」が次の格助詞「を」に接続する形 (準体法) で連体形となっている。さらに (29c) でも従属節ではないが、助動詞「つ」の連体形「つる」で文が終止していることから、一種の体言止めの名詞化が発生していると解釈することも出来る。以上のように、「が」や「の」が連なる述語では、終止形という通常の主節の形式と共起しない。

以上を図示すると以下の意味地図として示すことが出来る。ここでも (11) の関係性は適用可能であると見なすことが出来、隣接した領域を占めていることが確認できる。

分離可能 所有	分離不可能 所有	派生 名詞	関係節・ 名詞化節	主節
[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]

図 7 古代日本語所有形式「が・の」の意味地図

4.6. アイヌ語・タガログ語の所有形式

さらにアイヌ語では、冒頭で見たように、所有形式がさらに広い機能領域を占めていることを具体的に示していく。アイヌ語においては、2種類の名詞が存在し、独立して用いることのできる名詞（分離可能所有の名詞）と、所有者が必ず必要な名詞（分離不可能所有の名詞）が統語的に区別される。独立して用いることのできる名詞は、所有形式として X-kor N (X=bound pronoun) を用い、所有者が必ず必要な名詞は X-N という形式を用いる（佐藤 2008: 152-4）。

(30) 分離可能所有

- a. *ku-kor kane* 'my money'
- b. *ku-kor ku* 'my arrow(s)'
- c. *ku-kor ay* 'my bow'

(31) 分離不可能所有

- a. *k-otopi* 'my hair'
- b. *ku-matnepoho* 'my daughter'
- c. *ku-kotanu* 'my village'

(佐藤 2008: 152-4)

そして冒頭でも述べたように、アイヌ語では、節の A/S/O を表す代名詞も分離不可能所有と同一形式で表現される。つまり、分離不可能所有における Pronoun-N と対応する形で、Pronoun-V という形態的構造をなし、主語で用いられる代名詞は、所有者を示す代名詞と同形をなす<sup>6</sup>。例えば以下の例を参照（佐藤 2008: 24）。

- (32) a. *kani k-arpa wa.*  
 I 1SG-go PARTICLE  
 'I will go'
- b. *keraan kam ku-kor wa k-ek.*  
 delicious meat 1SG-have and 1SG-come  
 'I brought delicious meat with me'
- c. *tan pe ekasi ku-kore rusuy.*  
 this thing grandfather 1SG-give want  
 'I want to give this to my grandfather'

(32a) は自動詞の主語、(32b) は他動詞の主語、(32c) は複他動詞の主語である。母音の前に *ku-* が来ると音韻変化を起こして、*k-* となっているが、すべて同一の形式である。上の例では、名詞句内の所有者であっても、主節の主語であっても、同一形式で現れることが分かる。概念空間とそれに基づいた含意的普遍性が正しければ、アイヌ語では、所有者標示と主語が同一形式で現れるので、その中間段階の従属節の人称標示や、語彙的名詞化表現における人称標示も同一の形式であるはずであり、実際にその分布が確認できる。(知里 1923 より。ただし (33b) は Shibatani 1990)

- (33) a. *ci-erampoken*  
 1PL-compassion  
 'my compassion'
- b. *ci-kasnukar*  
 1PL-look.up  
 'our blessing'
- c. *a-mi-pi*  
 1sg-wear-NMR  
 'my cloth'
- d. *a-koeyam-pe*  
 INDEF-worry-NMR  
 'our worries'

まず (33) に見られるような派生名詞においても (33a, b) のようなゼロ派生、(33c, d) のような *-pi*, *-pe* を用いた名詞化を経て、その動作主・主体として所有者・主節の主語と同一



の標識を用いることが出来る。さらに (34) に見られるような従属節内の主語であっても、その代名詞として所有者・主節主語と同一の形式が選択されている（知里 1923 より。ただし (34c) は Shibatani 1990）。

(34) a. 関係節

pon ekaci ku-kor nisatke  
small child 1SG-have next day

「小さな子どもが生まれた次の日」

b. 名詞化節

aynu pito utar ci korpare-p ne kusu  
person PL 1PL give-NMR be because

「私が人間たちにくれたやったものだから」

以上を踏まえると、アイヌ語では、分離可能所有はそれのみで狭い領域を占め、分離不可能所有に関しては、派生名詞の補語、従属節の主語を経て、主節主語にいたる機能領域をカバーしていることが分かる。よってここでも (11) の含意的関係が成立しており、それを概念空間上に図示すると以下のような意味地図を描くことが出来る。

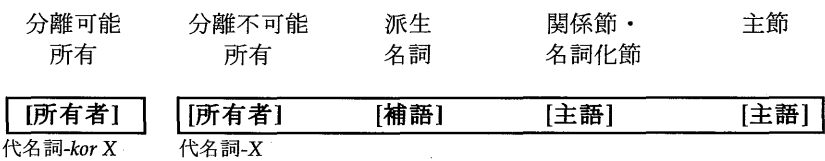


図 8 アイヌ語の代名詞と 2 種類の所有形式に関する意味地図

このような所有者から主節主語に至る分布はアイヌ語以外にも、タガログ語などのフィリピン諸語や、タリアナ語にも見られるものであり、分離可能・不可能の区別がある言語では、図 8 のアイヌ語と同様の分布を示すこととなり (e.g. タリアナ語 Aikhenvald 2003)、その区別がないタガログ語のような言語では図 9 のように、分離可能所有の所有者から主節の主語までの機能領域を一つの形式が占めるような分布を取るようになる<sup>7</sup>。

分離可能 所有	分離不可能 所有	派生 名詞	関係節・ 名詞化節	主節
[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]

図 9 タガログ語の所有形式に関する意味地図

## 4.7. 総括

以上、さまざまな言語の所有形式の記述を整理していく中で、図 2 で示した概念空間とそれに基づいた (11) の含意的関係の有効性を確認した。以上をまとめると、以下のような分布として整理される。

	分離可能 所有	分離不可能 所有	派生 名詞	関係節・ 名詞化節	主節
A	[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]
B	[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]
C	[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]
D	[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]
E	[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]
F	[所有者]	[所有者]	[補語]	[主語]	[主語]

図 10 諸言語の所有形式の多義性に関する意味地図

この表は、A で所有形式に分離可能・不可能の区別があるヤラワラ語・タリアナ語・アイヌ語などの言語において見られる分離可能所有の分布が示されており、B はその種の区別がない日本語の「つ」のような所有形式に見られる分布である。さらに C は中国語や広東語などのように所有形式が派生名詞の補語を示すような形式であり、英語のような動名詞の主語を表すような言語を経て、D で示されるような従属節の主語まで機能を拡張させている所有形式（日本語の「が・の」）に至る。そしてタガログ語のように所有者から主節の主語までをカバーする言語から、アイヌ語のような分離不可能所有が（他動詞の）主語を担うようなパターンがそれぞれ E や F として示されている。

この図では、諸言語における所有形式の多義性を記述するに当たって、ある程度概念空

間の設定が妥当であることが分かる。またそれに基づいた「ある所有者を表す形式が概念空間上の複数の領域を占める場合、その分布は概念空間上の隣接した機能を占める」という含意的関係はある程度の有効性を持つと思われる。

## 5. 所有の概念空間の概念的基盤

4節では、所有形式の分布が3節で設定した概念空間上の隣接した機能として規定できることを実証した。しかし、この概念空間は、あくまでも所有形式の多機能性を説明するために導入した装置である以上、この概念空間がどのような意味的基準に基づいているのは自明ではない<sup>8</sup>。

ここで具体的に指摘するのは、「定形性」(finiteness) と「名詞性」(nouniness/nominality) の交叉的な関与である。本節ではこの定形性と名詞のプロトタイプ性を認知言語学を初めとした研究から概観し、それが実際にどのように適用可能であるかについて考察していく。それによってこの所有形式の多機能性のバリエーションに対する意味的基盤を検証することとしたい。

### 5.1. 定形性のパラメーター

finiteness という用語は、本来的には人称・数・時制・法などの範疇によって形式を分ける定動詞 *finite verb* とそれらの影響を受けない動詞、非定形動詞 (*non-finite verb*) という動詞の分類として捉えられてきた (『言語学大辞典・術語編』953-4)。しかし、Givón (1990) は、定形性は「ある節が、他動詞を備えたプロトタイプ的な主節と、どのくらいの近似性を持つか (Givón 1990: 853)」という、節の特徴として捉え直している。さらに上記の定義からも分かるように、これは二値的な概念ではなく、スケール性を持つ段階的な概念かつ、様々な要因が絡み合う複合的な現象であることを指摘している (Givón 1990: 853)。

#### (35) Finiteness ranking of major verb-form categories:

**most finite**

INDICATIVE

MODAL

PARTICIPIAL

INFINITE

NOMINAL

**least finite**

上の表は、動詞の形式に現れる定形性の徴候を示したものである。もっとも定形性の高い

動詞形が主節で現れる *indicative* (直説法) であり、その次に従属節で現れる動詞形である *subjunctive* (接続法) を初めとしたモーダル形がそれに続く。さらに分詞、不定詞、語彙的な名詞化とその定形性が落ちていくと論じている (*ibid.*: 854)。

またこの *Givón* の分析を語用論の観点から捉え直すと、主節と従属節の違いには発話行為が関与しているか、より厳密にはある命題が発語内効力 (*illocutionary force*) を持ちうるかが関与していると思われる。日本語の終助詞「よ」「ね」が主節にのみ現れるという現象 (渡辺 1953) はまさにそれら終助詞が発話行為を表すという指摘と考え合わせると、主節と従属節の定形性の高さを分ける 1 つの基準はその節が発語内効力を有しているかという観点から整理できる<sup>9</sup>。これは遂行動詞が非遂行動詞に埋め込まれると通常非文となるという指摘とも合致する (山梨 1985: 78)<sup>10</sup>。

この *Givón* の定形性は、所有形式の多機能性の分布と重なりを持つ。具体的には定形性は語彙的な名詞化から主節までのスケールと一致している。

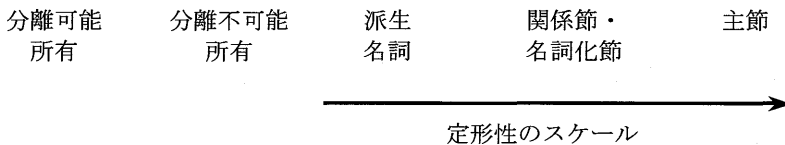


図 11 所有形式の概念空間と定形性のスケール

## 5.2. 名詞性のパラメーター

次に、分離可能・不可能所有などを含んだ概念空間の左側が、名詞性 (*nouniness/nominality*) のスケールによって捉えられることを示したい。Ross は一連のカテゴリーの段階性・フェジー性の研究の中で、英語における名詞のプロトタイプ性が以下のようにまとめられることを示した (Ross 1973)。

- (36) a. *that-clauses* (*that Max gave the letters to Frieda*)  
 b. *fo NP to V X* (*for Max to have given the letters to Frieda*)  
 c. *embedded questions* (*how willingly Max gave the letters to Frieda*)  
 d. *NP (Accusative) V+ing X* (*Max giving the letters to Frieda*)  
 e. *NP's V+ing X* (*Max's giving the letters to Frieda*)  
 f. *Action Nominal* (*{Max's / the} giving of the letters to Frieda*)  
 g. *Derived Nominal* (*{Max's / the} gift of the letters to Frieda*)

h. Noun (*spatula*)

(ibid.: 351)

これは下に行くにつれ、名詞としての特性が高まっていくことを示しており、分離可能・不可能の区別を除いては、所有形式の多機能性に対する概念空間と類似性を持つ。このように考えると、概念空間の左側から、に至るまで名詞のプロトタイプ性の度合いとして位置づけることが予測できる。

しかし、この名詞のプロトタイプ性に対してどのような機能的な特徴付けができるかについては、多くの議論が存在する。具体的には (i) Hopper and Thompson (1984) による談話的機能からの特徴付け、(ii) Givón (1990) による時間的持続性 (time stability) としての特徴付け、(iii) Langacker (1991, 2008) による概念的自律性 (conceptual autonomy) からの概念的特徴付けなどがある。ここでは特に、後者の Givón と Langacker の名詞のプロトタイプ性を取り上げ、それらが所有形式の多機能性の分布を分析するのに有効であることを示す。

## 5.2.1. 時間的持続性と概念的自律性

Givón (1990) は名詞・形容詞・動詞を概念的に規定するために、時間的持続性 (time-stability) という基準を提出している。Givón によると、もっとも時間的持続性が高いカテゴリーが名詞であり、その中でも最もプロトタイプ的な名詞である具体的・物質的で小型の「石・木・犬・人」などの概念は時間的に永続的であり、名詞としてカテゴリー化される。一方で、瞬間的な変化を伴う概念は基本的に動詞としてカテゴリー化されると論じている (Givón 1990: 51-2)。

また Langacker (1991) は彼の認知文法の枠組みの中で、上記の Givón の研究から発展させ、さらに「概念的自律性」が名詞のプロトタイプ性に関与していると論じている (ibid.: 13)。そこではまず「世界を物質的な物体の相互作用として捉える」ビリヤードボールモデルという事態解釈のモデルを提出し、それを基に、彼は名詞には以下のような概念的経験基盤 (概念祖型 (conceptual archetype)) が存在すると論じている<sup>11</sup>。

- (37) a. A physical object is composed of material substance.

(物理的な物体は物質的な実体から構成されている)

- b. We think of an object as residing primarily in space, where it is bounded and has its own location.

(我々は物体を第一に空間上に存在し、空間においては有界的である場所に位置づけられると捉えている)

- c. In time, on the other hand, an object may persist indefinitely, and it is not thought of as having any particular location in this domain.

(一方時間的には永久的に持続するのであり、時間のドメインにおいてある特定の位置を占めるとは捉えない)

- d. An object is **conceptually autonomous**, in the sense that we can conceptualize it independently of its participation in any event.

(物体はそれが参与する事態からは独立的に概念化されうるという点で、概念的に自律している) (Langacker 2008: 104 ; 括弧内は拙訳による)

ここで Langacker は Givón を参照しながら名詞のプロトタイプとしては物質で構成されている物体で、それが時間的に永続的な性質を持つとしている<sup>12</sup>。しかしここで重要な指摘は (37d) の「概念的な自律性」を備えていると論じている点である。最も典型的な名詞は、どのような概念を介せずともその概念が自律的に想起できることを捉えており、動詞がある参与者を必ず前提にする (conceptually dependent) という点で、動詞との最大対立が発生している。

### 5.2.2. 名詞性のスケールと所有形式の概念空間

この一連の概念的なプロトタイプ性は、所有形式の多機能性に対する概念空間との大きな類似を見せている。分離可能所有の所有物は、その定義上、所有者から離れて概念化できることが前提となっているので、概念的に自律しているという特徴を備えていると言える。しかし、分離不可能所有に用いられる名詞や、派生名詞、名詞化された節などは義務的に項を要求するという点で、概念的に自律していない。

さらに、Givón などでも述べられている、「時間的持続性」を併せて考えると、分離可能・不可能所有の指示対象は、具体物である以上、時間的持続性は高い。しかし、派生名詞 *the city's destruction* や、名詞化節 *that he fell* などはイベント性を内在していることから、必然的に時間的持続性は低い。これら 2 点を名詞のプロトタイプ性として考えると、以下のような名詞性のスケールの反映として所有形式の概念空間を捉え直すことができる。

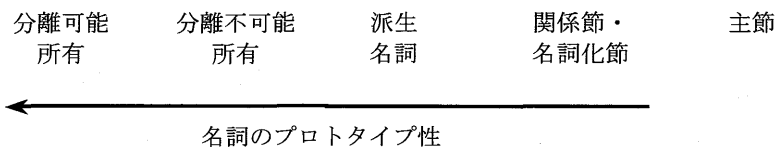


図 12 所有形式の概念空間と名詞のプロトタイプ性

5.3. 所有形式の概念空間と名詞性・定形性

以上より、所有形式の概念空間には 2 種類のプロトタイプ性のスケールが交叉的に関わっていると捉えられる。つまり各言語の所有形式の意味地図と重ね合わせると、どのスケールのどのレベルに所有形式の機能領域が分布しているかが明らかになる。

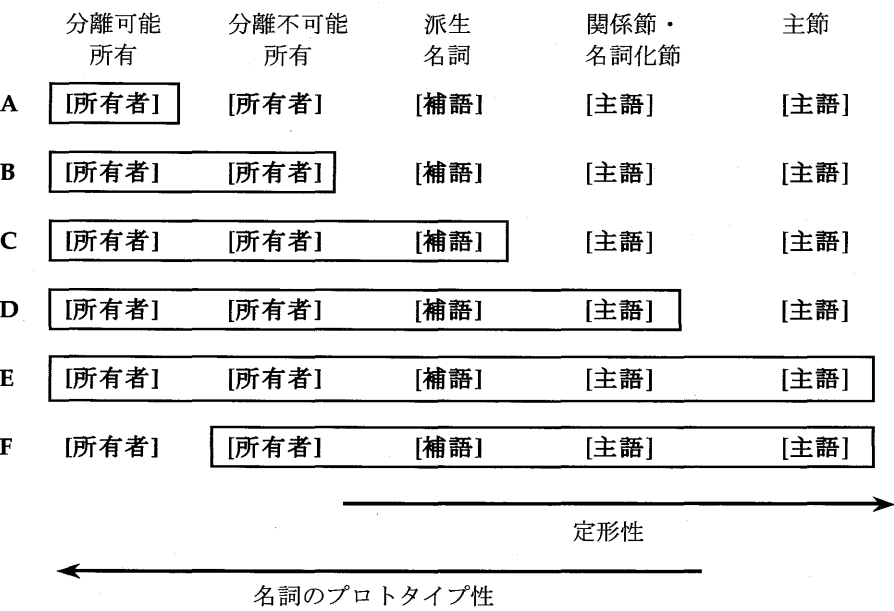


図 13 所有形式の意味地図と定形性／名詞性のスケール

例えばアイヌ語では 4 節で述べたように分離可能所有 A と分離不可能所有 F を形式的に区別するが、そこには、名詞性のスケールの中でも、概念的に自律的か否かが関わっていると見なせる。つまり、分離可能所有は概念的に自律した名詞に付与され、それ以外の所有・主語標識は概念的に従属的で、他の概念によって補われるべき表現に付与されると考えられる。また B のようなパターンは、時間的持続性が関与していると考えられる。分離可能所有・不可能所有は一貫して派生名詞ではないことから、概念の基盤にイベントは存在しない。つまり、時間的に永続的であると考えられるものに対して B のような所有形式が用いられると考えられる。

一方でさらに C や D のパターンは、名詞性のスケール以上に、定形性のスケールが関与しているパターンである。ここでは概念的に自律的か従属的か、また時間の永続性を持つ

かどうかという特性は直接的には関与せず、低い定形性を持つことがそのカテゴリー化の条件として含まれている。C の場合にはもっとも低い定形性、つまりテンス・アスペクトといった文法的形式を付与できないというレベル、D の場合には、主節で使用できるか否かが問題となっているので、ある命題が発語内効力を持つか、という語用論的な差異が関与していると分析できる。また E では、そのような名詞性のスケールと定形性のスケールのすべてのレベルにおいて適用可能な形式であると言える<sup>13</sup>。

以上の考察の通り、所有形式が存在する概念空間には、2つのパラメーターが交叉的に関与しており、各々の所有形式は、各スケールのある任意のレベルに対応してその機能領域の分布が決定している可能性を示唆した。

## 6. 結語

本論では、所有性標示の多機能性に関する分析を行った。所有形式は、基盤としての概念空間を設定することで、含意的普遍性を仮説として提出し、それを言語類型論的な観点から分析し、その有効性を示した。またこの多機能性が2つのパラメーター、名詞のプロトタイプ性のスケールと定形性のスケールが複合的に関与していることを示した。

この研究が示唆することは以下の2点である。まず通言語的に適用可能な名詞のプロトタイプは何かという問題に対しては認知言語学や、談話・機能言語学の中でもさまざまな提案がなされてきた。それに対してこの所有形式の多機能性の分布は、意味論的な観点から説明した Langacker, Givón の提案が具体的な分布のパターンで現れているという点で興味深い。これは Hopper and Thompson (1984) らが提唱する談話機能からの説明では説明しきれない意味論的なプロトタイプ性の重要性を示していると言える。

さらに2点目として、この研究は従来 Chomsky (1970) らが節構造と名詞句構造の間には、構造的並行性が存在すると主張しており、基本的にその提案に関しては、形式的な説明であれ、機能的な説明であれ、様々な意見が提出されている。それに対して本論ではむしろ、節構造と名詞句構造は連続的であり、そこには名詞のプロトタイプ性と節のプロトタイプ性、つまり定形性が交叉的な形で関与している可能性を示した。もしこれが正しいとするならば今後、これはもっとも定形性が高い主節から、典型的な名詞句までがどのような形で連続体を成しているのか、そこにはどのような要因が関わっているのかなどの問題を提起することとなる。

注：

- 1 言語によっては、所有者を表す形式が、ディルバル語、中国官話、広東語のように、関係節の標識と同一形式を取る場合も存在するが (Dixon 1972, Dixon 2010b)、ここでは特に



その方向性については扱わず、所有者を表す形式が S, A を表す形式と同一形式を取る場合を取り扱う。

- 2 ただし、その中間的な振る舞いをするカテゴリーが存在することが Dixon によって示されている。そこでは母親・妹・夫など親族名詞は *alienable possession* と *inalienable possession* の中間的なカテゴリーとして区別される。ここではそれ以外の代表的な2つの区別について扱う。
- 3 それが S (自動詞主語) にも当てはまるか否かは、当該言語のある人称が対格システムを採用しているか、能格システムを採用しているかによって変化する。例えばマヤ語族では能格システムが存在するため、三人称代名詞において A 機能と所有者は同一形式で表されるが、自動詞の主語ではそのようなことは起こらない (Blake 2001)。
- 4 例えばアイヌ語では通言語的に見られるような意味でのテンスは存在しないが、それでも修飾関係を見ると、副詞ではなく形容詞でのみ修飾可能である点などから、これが名詞化節・関係節と区別されるべき特徴は有する。
- 5 「が」「の」の区別は主として所有者の意味的な差異が関わっている。その中でも敬意の対象となる体言には「の」が使用され、親愛、軽侮、嫌悪、憎悪等の情を含んだ表現には「が」が用いられるという「尊卑の待遇の差」が見られる。詳しくは山口 (2001: 616) を参照。
- 6 アイヌ語は、基本的に自動詞の主語と他動詞の主語の形式が同一で、他動詞の目的語は異なった形を取るため、対格型システムを採用しているといえるが、一人称複数 (除外形・包括形) は自動詞の主語と他動詞の主語で形式が異なるいわゆる三立型 (triplet) を成している。所有形式と同一の形式を取るのは、一人称複数形の場合、他動詞の主語である (佐藤 2008: 29-32, 155)。
- 7 タガログ語をはじめとした言語に主語という概念がどのように適用可能かについては、多くの議論があるが、ここでは柴谷 (1989) にしたがって、主語概念が提題機能を表す形式とその他の動作主を表す形式に分離していると考えれば、例えば *niya* (彼) という代名詞は、主節での動作主の機能においても主語性を一部担うような要素が内在しているものと見なせる。
- 8 これは例えば Silverstein (1976) が導入した 1 人称 > 2 人称 > 3 人称 > 親族名詞・固有名詞 > 人間名詞 > 動物名詞 > 無生物名詞 という名詞句に見られる階層関係 (Animacy hierarchy) は、オーストラリア原住民語に見られる能格型格システムと対格型格システムの共存を説明するために指摘された階層であり、これらの階層がどのような意味的な基盤に基づいているのかは議論の余地がある、という事態と類似している。
- 9 山梨 (p.c.) によると、日英翻訳を対照的に観察すると、日本語の終助詞「よ」「ね」は英語では *I tell you* という発話の力を表す表現とが一致すると述べている。
- 10 Dixon (2010a) も、一般に文はどの発話行為であるかを指定する標識が存在し、それをモードとして規定すると述べている。これははっきりと節ではなく文レベルで決定されるとしており、本論の見解と合致する (*ibid.*: 95-6)。

- 11 この概念祖型という概念は、イメージスキーマや一般的認知能力とも深く関与する概念であるが、本稿では概念祖型に関するそのような議論を子細には検討しない。詳しくは Langacker (1993, 2008: ) を参照。
- 12 Langacker (1991) では Givón との関係からビリヤードボールモデルの性質について論じている。Langacker (1991: 13-4) を参照。
- 13 言い方を変えると、E のタイプは両スケールの制約を全く受けないことから、それ以外の要因でもってその存在理由があるともいえる。それを支える他のパラメーターはこれ以外の用法との比較によって明らかになると思われるが、所有者が所有物に対して、または主語がある事態に対して共通に持つ特徴である「制御性」(controllability) が関与している可能性がある。

## References

- Aikhenvald, Y. Alexandra. 2003. *A Grammar of Tariana, From Northwest Amazonia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blake, Barry J. 2001. *Case*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Chomsky, Noam. 1970. "Remarks on Nominalization" in Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*. Waltham, Massachusetts: Ginn and Company. pp.184-221.
- Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William. 2003. *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dita, Shirley N. 2007. *A Reference Grammar of Ibanag*. Ph.D. thesis, De La Salle University, The Philippines.
- Dita, Shirley N. 2010. "A Morphosyntactic Analysis of the Pronominal System of Philippine languages" *PACLIC 24 Proceedings*. pp. 45-59.
- Dixon, Robert M. W. 1972. *The Dyirbal language of North Queensland*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, Robert M. W. 2004. *The Jarawara Language of Southern Amazonia*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, Robert M. W. 2010a. *Basic Linguistic Theory Vol.1: Methodology*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, Robert M. W. 2010b. *Basic Linguistic Theory Vol.2: Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Du Bois, John W. 1987. "The Discourse Basis of Ergativity." *Language* 63 pp. 805-855.
- Givón, Talmy. 1990. *Syntax Vol.II*. Amsterdam: John Benjamins.

- Givón, Talmy. 2011. *Ute Reference Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Greenberg, Joseph. H. 1961. "Some Universals of Grammar: with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements." Greenberg (ed.) 1963 pp. 73-113.
- Greenberg, Joseph. H. (ed.) 1961. *Universals of language*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Haiman, John. 1983. "Iconic and Economic Motivation" *Language*. 59-4, pp. 781-819.
- Haspelmath, Martin. 1997. *Indefinite Pronouns*. Oxford: Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin. 2003. "The Geometry of Grammatical Meaning: Semantic Maps and Cross-linguistic Comparison." In: Tomasello, Michael (ed.) *The New Psychology of Language*, vol. 2. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, pp. 211-242.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. 1984. "The Discourse Basis for Lexical Categories in Universal Grammar", *Language* 60, pp. 703-752, Aarts, Bas, David Denison, Evelien Keizer, Gergana Popova. 2004. (eds.) *Fuzzy Grammar: A Reader*. pp. 247-293 に再録.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編). 1996. 『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京: 三省堂.
- 切替英雄 (編著). 2003. 『アイヌ神謡集辞典: テキスト・文法解説付き』東京: 大学書林.
- 松村明 (編). 1971. 『日本文法大辞典』東京: 明治書院.
- Matthews, Stephen, and Virginia Yip. 1994. *Cantonese: A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Mithun, Marianne. 1999. *The Languages of Native North America*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. 1986. "Nouns and Verbs", *Language* 63. pp. 53-93.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions" *Cognitive Linguistics*. Vol. 4 -1, pp. 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Po-Ching, Yip and Don Rimmington. 2004. *Chinese: A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Ross, John Robert. 1973. "Nouniness." In Osamu Fujimura (ed.), *Three Dimensions in*

- Linguistic Theory*, Tokyo: TEC Company. pp. 137-257. Aarts, Bas, David Denison, Evelien Keizer, and Gergana Popova. 2004. (eds.) *Fuzzy Grammar: A Reader*. pp. 351-422 に再録.
- Schachter, Paul, and Fe T. Otones. 1972. *Tagalog Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.
- 柴谷方良. 1989. 「言語類型論」『英語学の関連分野』, 東京: 大修館書店. pp. 1-179.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The Languages of Japan*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Silverstein, Michael. 1976/1986. "Hierarchy of Features and Ergativity." In Muysken, Pieter and Henk van Riemsdijk (eds.) *Features and Projections*. Dordrecht: Foris Publications.
- 田村すず子. 1988. 「アイヌ語」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第一巻, 東京: 三省堂
- 角田太作. 2009. 『世界の言語と日本語 改訂版: 言語類型論から見た日本語』東京: くろしお出版.
- 山口明穂, 秋本 守英 (編). 2001. 『日本語文法大辞典』東京: 明治書院.
- 山梨正明. 1985. 『発話行為』東京: 大修館書店.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論—文法のゲシュタルト性—』東京: 大修館書店.
- 渡辺実. 1953. 「叙述と陳述 一述語文節の構造一」『国語学』13/14.
- 渡辺実. 1971. 『国語構文論』東京: 塙書房.

## 略号一覧

A	transitive subject	PL	plural
DET	determiner	POSS	possession
ERG	ergative	PR	possessor
GEN	genitive	S	intransitive subject
INDEF	indefinite pronoun	SG	singular
NMR	nominalizer	1	1st person
O	transitive object	2	2nd person
PARTICLE	pragmatic particle	3	3rd person
PD	possessed noun		